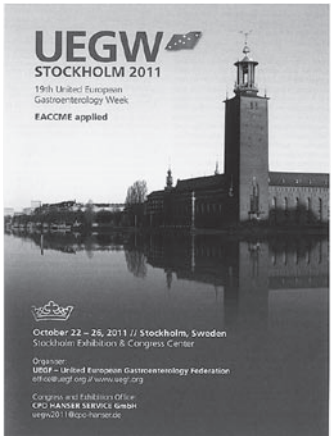
Essay 02#

ストックホルムでの学会に参加して

公立昭和病院
上西 紀夫

昨年の暮れから今年のはじめは例年にない寒さが続き、春の到来が待ち遠しかったと思います。さて、寒さといえば北海道や北欧の国々の名前が頭に浮かんで来ますが、その代表ともいえるスウェーデンの首都ストックホルムで、昨年の10月下旬に開催されたUEGW（欧州消化器病週間）（写真1）に参加したので、その時の印象を思いつくまま書き連ねてみました。

まずはフライトについてですが、スウェーデンはデンマークとノルウェーと一緒にスカンジナビア航空（SAS）を運営しているにも関わらず、日本からの直行便がないことに驚きました。欧州の各都市からの乗り継ぎが必要で、欧州のどの航空会社を選ぼうかと悩んでいたとき、少しお付き合いしていただいている高名な音楽評論家の方がフィンランド航空（フィンエアー）が良かったと言っておられたことを思い出しました。また、ご承知のようにフィンランドはスウェーデンの隣国であり、乗り継ぎ時間も一番短いので、このフィンエアーに決めました。結果的には、接遇は合格点でしたが、残念ながら機内食は今一でした。ただし、搭乗員から勧められたビール（名前は失念しましたがデザインがユニーク）は大変おいしかったです。なお、余談ですが、これまで経験した機内食で一番良かったのはオーストリア航空で、次が昨年の9月末に搭乗した羽田発シンガポール行きのJAL（往きの機内食だけ）でした。



❶ノーベル賞受賞晩餐会が行われる市庁舎を入れた学会のポスター

10時間ほどのフライト後、フィンランドのヘルシンキ空港に無事到着しました。そこで驚いたことが二つありました。その一つは、空港の周りの森に生えている木すべてがきれいにそろって垂直に伸びていたことです。それは見事な光景でした。もう一つは、空港内の案内が現地語以外に英語（これは当たり前）、中国語、韓国語そして日本語で、しかも豊富に掲示されていました。他方、スウェーデンのストックホルムの空港では、現地語と英語だけ、しかもまばらで同じSASの国とは思えませんでした。また、フィンランドに入国した後はスウェーデンの入国審査はありませんが、逆に、スウェーデンからフィンランド経由で帰国する際には、スウェーデンとフィンランド

の両国で通関審査があり、その不統一性には疑問を覚えました。ただし、両空港では長身でスタイルが良く色白で美しい人々が多く、待ち時間を短く感じることができました。

午後3時過ぎにストックホルムに到着し、宿泊先のホテルまでタクシーで行くことにしました。空港を出ると目の前に多くのタクシーが並んでいました。順番に縦に並んだ車に乗るのが普通と思いますが、ここでは横一線に並んだタクシーの中から選んで乗車するのがルールとのことでした。市内までの料金は定額制ですが、車によって若干の相違があります。そこで、値段が安いこと、車がきれいなこと（車を大事にしてサービス心があることを示唆する？）、そして運転手の顔付きを基準にして、良さそうなドライバーを探して指名しました。期待通り安全運転で、途中でカロリンスカ研究所（写真2）や歴史的な建物があり慣れない英語で質問したところ、彼もそれほど英語が流暢ではありませんでしたが、一生懸命に親切に答えてくれました。車のことで驚いたことは、市内への高速道路はそこそこ混んでおり、とくに帰宅すると思われる車が渋滞でノロノロと走っていましたが、そこに無理に割り込む車は皆無でした。また、市内を歩いているとき、道路を横断しようとすると必ず止まってくれます。どこかの国とは大きな違いで、「福祉」を大事にする思いやりのあるお国柄を反映しているのかと思います。

ホテルはストックホルムの市庁舎のそばで、また中央駅も近くでした。学会場は電車で10数分の駅を降りてすぐのところでしたが、何せスウェーデンは物価が高い（消費税25%）のでタクシーの利用はあきらめて電車で往復しました。もっとも、学会のタッグを付けると電車や公共交通手段は無料でしたが。

学会場でのRegistrationとスライド提出が終わり、やや迷いましたが講演会場に到着しました。今回のプログラムは日本と欧州の内視鏡学会による合同シンポジウムで、私は最後に日欧の内視鏡の歴史を基に今後のお互いの交流と発展についての講演を行うことになっていました。講演会場に入ってびっくりしました。大変広い会場で、数百人は優に入れるスペースでした。プログラム開始10分前であったこともありますが、まさにがら～んとしており、ややがっかりというか、もう少し小さな会場はないのかな、と思いましたが今さら変更は不可能です。

定刻にプログラムが開始され、日本側、欧州側からそれぞれ順番に発表がありました。会場が広いせいもあるのか、季節柄か、はたまた講演前の緊張からか生理現象を解決する必要が出てきたた

❷

❸

め、会場の後方のドアから出ようと振り向いたところ、何と会場はほぼ満員状態でした。大変びっくりすると同時に緊張感もぐっと増してきました。しかし、おかげさまで無事発表を終え、第1回の日欧合同シンポジウムは大成功の裡に幕を閉じました（写真3）。今後も学会の国際化を目指して、春の日本消化器内視鏡学会総会と秋のUEGWで若手中心の合同シンポジウムを開催することが決定しました。

その後、午後のポスターセッションの司会を無事終了し一旦ホテルに帰り、家内と現地在住の家内の知人と一緒に市内見物に出掛けました。ストックホルムの人口は約75万人と少なく、従って国の首都とはいえ面積は広くなく、ホテルの近隣に主だった建物や博物館がありました。そこでまずは目の前にある国会議事堂の中を通って王宮に沿って散歩をすることにしました。議事堂の壁に施されたやや不思議な模様を見上げ、それをバックに写真を撮ろうとしたところ、観光客と思われる二人連れの人から（確かエストニアから来訪）「あなたは先ほど、学会で講演した日本人ではないか」と声をかけられ、「大変素晴らしい講演で感動した」と言われ、親切にもこちらの3人の写真を撮ってくれました。ただし、私と彼らとの記念撮影の依頼はありませんでしたが……。それはともかくとして、思いがけずにも海外の地でこのような賛辞の言葉を聞くことができ大変嬉しかった次第です。

さて、ストックホルムの街並みに関して、素晴らしいというか、さすがというか、文化に対する姿勢、考え方がどこかの国と大きく違うことを知りました。というのは、寒い国であるので建物と壁は暖色調を基調にしていることや（写真4）、とくに歴史的な建物やその周囲の建物に看板を出す場合は、市の許可がいるとのことでした。どこかの国の首都で、深夜までけばけばしいネオンサインや大型のスクリーンがあふれているのと比べると……。ただし、夜にお目当てのおいしいお店を見つけるにはやや不便でしたが、歴史のある小さな町ですので、のんびりと一つ一つ建物を確認しながら行くのも一興でした。また、市内にはこのような看板の店が多数目につきました（写真5）。つい最近までは韓国料理がブームであったとのことですが、健康志向やもともと海産国であり、また、北欧の代表的料理であるスモーガスボードにあるように酢の物の料理に馴染んでいることから、今では街中に「Sushi」屋があり繁盛しているとのことでした。実際、食べてみましたが、大変おいしかったです。なお、お米は大震災のことがあり、カリフォルニア米を使用している

❷カロリンスカ研究所の入り口にて　❸日欧内視鏡学会合同シンポジウムでの総括講演　❹市中の建物の壁は暖色調　❺街中にあふれている「寿司屋」の看板

とのことでした。

次の日は市内見学に出掛け、王宮や昔の都市であるガムラスタンにある大聖堂、ノーベル博物館、そして17世紀に造られた戦艦で、出帆直後に沈没してしまったヴァーサ号博物館を訪ねました。この船は、当時の国王が最強の戦艦を作ろうとしてあれもこれもと装備を付けたため、バランスを崩して沈没してしまったとのことです。権力を笠に欲を掻くとロクでもないことの見本です。

さてスウェーデンといえばノーベル賞ですが、授賞式は平和賞を除いてストックホルムのコンサートホールで開催され、平和賞はノルウェーのオスロで行われます。その理由はいくつか説があるようですが、政治的な理由が大きいともいわれています。また、授賞式後の晩餐会はストックホルムの市庁舎のホールで行われます。そこで、日本では稀ですが海外ではよく行われている市庁舎のツアーがあったので参加し、晩餐会の会場を訪れてみました。さぞかし豪華で立派な会場かと思っていましたが、いわば普通のホールで何よりも狭いので驚きました（写真6）。ガイドさんの説明によると、この狭いホールで長テーブルに1300人が着席するので、一人当たりのスペースが決まっているとのことでした。すなわち、王族やVIP、そしてノーベル賞受賞者は約70㎝、それ以外の人は約60㎝のスペース、お互いの間が4㎝程度と、世界で最も混み合う宴会ともいわれています。さらに驚いたことに、それだけ混み合っているにもかかわらず、料理の交換は3分以内に行われるとのことでした。

もちろん、この晩餐会に参加することなどあり得ませんが、市庁舎のレストランで晩餐会メニューがあるとガイドブックに書いてあったので、予約をしました。そして、ストックホルムでの最後の夕食を楽しむべく、期待に胸を膨らませつつ席に座り、晩餐会メニューをオーダーしました。ところが何と何と、そのメニューは前もって予約をしなければダメだ、とのことでした。席が予約できたので安心してしまい、また、当然メニューにあるものと思い込んでいたのが敗因でした。それでも、何とかならないかと尋ねたところ、デザートだけは同じもがあるとのことで、それで満足することにしました。それがこれです（写真7）が、ちょっぴり残念な思いでした。

なお、ノーベルはダイナマイトを発明して巨万の富を得ましたが、何故、ダイナマイトを発明したかといえば、実はスウェーデンの土地は岩盤が多くて硬く、家を建てたり工事をする場合に大変苦労していたため、それを解決するために開発したとのことです。まさに、必要は発明の母です。

ということで、楽しくもあり、そしていろいろと勉強になった学会出張旅行でした。

❻晩餐会が開かれる市庁舎のホールで、ガイドさんの説明に聞き入っているツアーの参加者の皆さん　❼晩餐会で出されたものと同じのデザート